

令和5年度 達成状況 及び
令和6年度 教育(年度)目標

東筑紫短期大学

目 次

建学の精神と教育理念		1 頁
保 育 学 科	達成状況	2
	教育目標	5
食 物 栄 養 学 科	達成状況	9
	教育目標	14
専 攻 科	達成状況	18
	教育目標	21
学 生 部	達成状況	24
	年度目標	30
教 務 部	達成状況	33
	年度目標	35
事 務 部	達成状況	36
	年度目標	37

建学の精神と教育理念

昭和 11 年筑紫洋裁女学院が設立され、その後、幼稚園、中学校、高等学校、東筑紫短期大学、九州栄養福祉大学そして同大学院、九州リハビリテーション大学校と本学園は総合学園化してきて今日に至っている。この 70 数年間の道のりのなかで一貫してそれぞれの学校教育の精神的基盤になってきたのが「筑紫魂」という建学の精神である。現在は以下に記す「筑紫の心」となって簡略化されているが本学の教育理念の基盤として根底に流れているのである。創設者・宇城信五郎の起草したものである。

「教育とは心の畑を耕すことであります。ともすれば草を生い茂らせ狭隘にして痩せ細りがちな心の畑の草をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていくところに教育の使命があります。

東筑紫学園の建学の精神は教職員学生生徒が心をひとつにして勇気、親和、愛、知性の四つの芽を心の畑に種蒔き育てていくことにあります。

筑紫の心は国を愛し労働をいとわず親や祖先をあがめ己れをむなしくして社会に奉仕する人間像を理想にしています。」

そもそも建学の精神とは、主に私立大学（学校）などが創設されるときに、その大学の創設者がかけがえの独自性をもった理想的な教育思想・理念のことで建学の思想ともよばれる。主として、その大学の設置理念、教育内容の特徴、養成する人材の必要性、重要性及びその大学の社会に対する貢献内容などが表現されている。

本短期大学は被服科の短大から始まった。社会に役立つ実学としての和裁・洋裁とそれを根っこで支えるこの「筑紫の心」が不可分一体を目指して本学の教育がなされてきたのである。本学の生活実学教育課程はそういう意味で二つの構造的性格を持っている。つまり衣、食、住、子育て、介護という各学科の専門の知識、技術を修得探求させるということと、筑紫の心にある四つの徳目を育てながらやがてそれらを調和させ己をむなしくして社会に奉仕できる人間に成長させるという二つの教育的要請である。ここに本学の「生活者実学」の特徴がある。換言するなら現実社会で役に立つ専門的力とどんな困難な状況にぶつかっても生き抜いてゆく「^{まった}全き生命力」を養成するということである。

特にその生命力の養成における基本は、勇気・親和・愛・知性を力強く成長させ一つの人格の中で調和統一し真澄（ますみ）の天空のような心を創りあげることである。そのなにもものにも汚されない泰然自若の真澄の心が実存する時はじめて筑紫魂が発動するのである。この場合の筑紫魂とは言うまでもなく筑紫という地名から発する宇宙魂を指しているのである。我々は己を空しくしてこの我々を創造して下された宇宙創造の根源的に触れ合うことによるのみ社会に奉仕できる最高レベルの生命力を発現できるのである。

このように生活実学教育理念を支えるものの根本として本学の建学の精神が存在している。

令和5年度 教育目標の達成状況

－ 保 育 学 科 －

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する事を掲げ、目標達成に向けて取り組みを行った。

1. 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・『筑紫の心』を基盤に、学生一人一人の理解を深め、個々に応じた指導を行い、学修成果の評価（アセスメント）を効果的に実施した。学生のアンケートの結果で、建学の精神の理解度の数値は高い結果となった。

2. 主体的・対話的な深い学びの実現のための授業改善

- ・保育・教職実践演習で、2年次前期までに他の授業科目を通して身に付けてきた知識、技能を確認、自己評価し、授業内容を補完、向上できるよう授業を展開した。教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業が繋がる内容とした。その成果として、1年間で向上したレベルの主体性が高い数値を占めている。このように学生が自ら課題をもち、課題を解決し、成果をまとめ表現する授業を実施した。

入学時と比べて実技・実習科目ほど学業の向上を自覚している学生が多くなっていた。ピアノ実技等全くできなかったことが出来るようになった時に分かりやすく「向上した」と感じている。基礎教養科目の学業向上は学生には漠然としたつかみどころのない、或いは、明快さに欠け分かりにくい授業が多いと映ってる。いわゆる座学においても、もっと心を揺さぶられ、学ぶ実感が湧くような授業展開や創意工夫が必要で主体的・対話的な学びにしていく改善が必要である。理論は実践に融合した授業であり、実践に生かせることを具体的かつ明快に伝えていく。

3. 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

(1) 在校生の支援

- ・卒業を迎えた2年次はクラス担任に相談に来る学生が多かった。また、休学者、退学者がほとんどいなかった。学生の相談に応じやすい環境、時間にオフィスアワーを設定した効果と思われる。
- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携をとった。
オープンキャンパス及び授業を「認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園」にて行うことで、学生が子どもの声を聴きながら、関わる事が出来、有意義な授業展開ができた。また附属幼稚園への就職に繋がった。

(2) 教職員の協力体制と他部局との連携をはかった。

- ・クラス担任は今まで以上に学生把握に努め、初期対応の重要性を認識し、問題解決に向けて取り組んだ。教務部・庶務部等と細やかな連携・情報交換を行い、学生の生活態度や学修成績などを把握した。特に、授業料未納状況は会計課の進捗状況の連絡（随時）により適切な学生対

応ができた。

(3) 非常勤講師との連携

- ・本年度も非常勤講師との交流の一つとして教員の写真の交換を行った。非常勤講師と定期的に情報交換をした。その結果、学生の様子が把握できた。

(4) 卒業生への支援

- ・教職員は、卒業生の就職希望者が出た場合、就職指導課と連携を取り、相談に応じた。学科就職指導課の細やかなサポートにより、今年度の就職希望者はほぼ就職できた。

4. 学生の定員確保への組織的な取り組み

(1) 東筑紫学園高等学校との連携

- ・今年度は、東筑紫学園高等学校入学者数が増えた。東筑紫学園高校との高大連携を深めるプロジェクトチームを作り、学生募集に取り組んだ。企画広報課との連携により学園高等学校からの入学者が前年度に比べて13名増えた。そして、本学入学者の様子や卒業生の就職状況などをフィードバックした。

(2) オープンキャンパスの実施

- ・3月に行ったオープンキャンパスは、高校生が目線に立った、保育学科に関心・興味をもち理解が深まるよう、学科の魅力・保育士のやりがい伝えるなど内容の充実を図り、教職員・学生が協力して取り組んだ。6月のオープンキャンパス以降はすべて対面での実施となった。

(3) 学校訪問、出前講義への取組

- ・過去5年間の志願者数のデータを3月末に分析した。保育学科入学者数は、どの地域・高校からも減少していた。・教務課が計画する学校訪問ガイダンスは、本学科全教員で取り組んだ。

(4) 「母校へのメッセージ」の有効活用

- ・本学科の特徴ある取り組みの一つに、出身高等学校への写真レター「母校へのメッセージ」がある。これは大学生活の様子を出身校の後輩に送る「写真付きの後輩に向けての激励文」である。学生募集の一環として出前授業や高校訪問にも効果的に活用した。高校側へ高校卒業生の様子を知らせることが、次回の学生募集につながった。

5. 地域社会との交流及び社会貢献

(1) インターンシップ制度の活用

- ・「筑紫の心」手帳を作成し、インターンシップ制度とキャリア教育演習Ⅰ・Ⅱの授業、レクリエーションの授業との関連位置付けを明確にし、地域社会や保育現場と連携・協力した取り組みをした。インターンシップは、年間を通じてほぼ同じ学生が活用する傾向があった。来年度はインターンシップの活用について検討する。

(2) 子育て支援、地域との交流

- ・2月学校で学生が行う「子育て支援」のポスターを近隣の清水・泉台・到津・井堀・一枝市民センター、東筑紫附属幼稚園に貼っていただいた。学生が乳幼児と関わり、保育者としての技術、意識を高めた。
- ・12月の学校訪問時に、各高校の先生方に3月のオープンキャンパス実施に関する告知ができ、チラシを掲示する願いができた。また、1・2・3月の出前授業の折には3月開催オープンキャンパスのチラシを高校生に手渡し、出前授業内でも丁寧に説明することで、オープンキャンパ

ス当日の参加者を募ることができた。

- ・オープンキャンパスにおいて、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と連携をとり、附属幼稚園で行った。特に観察実習、模擬授業は、学生募集に大きな成果を上げた。

以 上

令和6年度 教育目標

－ 保 育 学 科 －

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

1. 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

・「アドミッション・ポリシー」、「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」を全教職員再確認、学生はキャリア教育にて確認する。本学の建学の精神である『筑紫の心』を基盤に、本学科教職員、非常勤講師と共に学生一人一人の理解を深め、個々に応じた指導を行い、学修成果の評価（アセスメント）を効果的に実施、今まで以上に豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備えた保育者を目指す指導を行う。

2. 教職員間の連携による活気ある協働体制の確立

- ・今年度より保育学科、専攻科の学科会議を同時に行い、保育学科生・専攻科生の様子を把握することで、保育学科の授業を担当する専攻科の教員の授業改善、専攻科生募集につなげることができるようにする。
- ・言動面において基本的なマナーに欠けている学生が少数だがいる。実習先にて指摘されることがないように、キャリア教育においてマナーに関する講義を取り入れると共に、日常的に全教職員が統一を図り、学生自身が基本的なマナーを身に付けられるよう対応する。
- ・保育学科、専攻科の担当者の職務分担を明確にし、機動的に教育に専念できるように業務担当組織の見直しを図る。

3. 主体的・対話的な深い学びの実現のための授業改善

- ・アクティブ・ラーニングによる授業の充実を図る。

全ての教科にて学生が自ら課題をもち、課題を解決し、成果をまとめ表現する授業を実施する。また、「キャリア教育演習Ⅰ・Ⅱ」を連動し、キャリアアップ演習を行い、学生自身が課題を見つけて、その課題を自分の力で解決する授業を展開する。

- ・保育・教職実践演習では、2年次前期までに他の授業科目を通して身に付けてきた知識、技能を確認、自己評価し、不足している授業内容を補完、向上できる授業を展開する。教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業が繋がる内容とする。

各教科にて指導案の書き方の指導を行う。

- ・シラバスの事前・事後学習の必要性を明示し、授業内容が理解できているか確認、学習進度を考慮しながら、分かりやすい説明を行い、学生の実態に応じた授業を展開する。

4. 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

(1) 教職員の協力体制

- ・保育学科、専攻科の教職員の協力体制を強化するとともに、クラス担任は今まで以上に学生状況把握に努め、初期対応の重要性を認識し、問題解決に向けて取り組む。

(2) 他部局との連携

- ・学生の生活態度や学修成績、授業料未納状況を把握し、適切な対応をする。そのため、クラス担任は、学生指導課・教務課・会計課等と日常的に情報交換し、学生の些細な変化にも気づけるようにする。その情報を学年会議、学科会議（FD 会議）などで報告する。保護者への対応（電話連絡、家庭訪問）も積極的に行う。

(3) 非常勤講師との連携

- ・本年度も非常勤講師との交流の一つとして教員の写真の交換を行う。非常勤講師と学科長、学年主任が定期的に情報交換を行い、学生指導に生かす。

(4) 在校生の支援

- ・本学科では、「建学の精神」に基づく「筑紫の心」手帳を見直し、学生の相談に応じやすいようにオフィスアワーの掲示を各教員の研究室前、及び 2-408 に貼り、学生が相談しやすい環境をつくる。
- ・卒業後に悩みを抱え、自分自身で解決できない場合には、大学に来て学科の教員・就職指導課に相談するサポート環境があることを常に伝える。安心して卒業し、仕事もできると実感してもらおう。
- ・欠席・遅刻が目立つ学生、問題に応じて、学年会議、学科会議（FD 会議）で情報を共有するとともに、対処法を検討し、学生指導に活かせるように、早めに担任による学生面談や保護者との連携を図り、休学者や退学者の削減へ繋げる。
- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携をとる。

1 回目の学外実習（保育所）で評価の低かった学生に関して面談だけに終わらず、細やかな助言と合わせて、子どもと関わる機会を増やしていく。附属幼稚園と連携を図り「学生による子育て支援」を行う。

- ・Wi-Fi についての説明は入学当初のオリエンテーション期間に指導説明をする。情報管理センターが掲示する Wi-Fi についての資料を見て覚えるようにキャリア教育、ホームルームにて伝える。
- ・就職指導課と連携を取り、1 年次の早い段階からキャリア教育等において就職支援を行って、就職率 100%を目指す。一昨年、県外の卒業生の就職後の様子が知りたいとの学生の声がかかれた。手紙及びオンラインにて卒業生の講演も検討していく。
- ・1 号館改装工事のため学生ロッカーが第 2 体育館に移動した。講義が行われる場所と離れているため休み時間内に実習着、スーツに着替えるためロッカーまで行くのは困難である。スーツ、実習着着用の授業は今年度に限り、回数を最小限にする。学生に安全管理のためロッカーの施錠をするように促し、教職員及び警備員が交代で見回りを行う。

(5) 卒業生への支援

- ・教職員は、卒業後のサポートをする。
- ・卒業生の就職希望者が出た場合、就職指導課と連携を取り、相談に応じる。

5. 学生の定員確保への組織的な取り組み

(1) 東筑紫学園高等学校との連携

- ・過去5年間の志願者数のデータを3月末に分析した。今年度も働きかけをするべき地域・高等学校をあげて取り組む。

年度	入学者数
令和2年度入学	31名
令和3年度入学	31名
令和4年度入学	15名
令和5年度入学	27名
令和6年度入学	18名

- ・上記の表のような入学者の推移がある。

保育学科として東筑紫学園高等学校との高大連携を深めるプロジェクトチームを作り学生募集に取り組む。高校生が、大学の授業に参加、附属幼稚園の子どもとの触れ合い、高校生と大学生との関わりをもつなどを行う。

また、東筑紫学園高等学校へ、本学入学者の様子や卒業生の就職状況などをフィードバックする。教務課と連携して短期大学に高校生を招き、実際の講義を受けてもらうことなどを高校側に提案する。高校生にわが校の魅力を実感してもらうことで学生数の増加に繋げる。

(2) オープンキャンパス・ゆめみらいワークの実施

- ・令和6年3月に行ったオープンキャンパスは、高校生の人数が減少している現状があり、予想より少なかった。今年度はガイダンスの内容を再検討し、高校生の目線に立った魅力ある内容とし、保育学科・専攻科教職員・学生が協力して取り組む。近隣の他短期大学が来年度の募集停止とのこと、心を引き締めて学生募集に取り組む。
- ・「ゆめみらいワーク」に関して、リーダー担当教員が計画を立て、全教員で取り組む。

(3) 学校訪問、出前講義、学校見学会への取り組み

- ・教務課が計画する学校訪問、学校見学会においては本学科全教員で取り組む。
- ・学校見学会は、高校生が保育学科、専攻科に関心・興味をもち理解が深まるよう、学科の魅力・保育者のやりがいを伝えるなど内容の充実を図る。
- ・学校訪問時にはオープンキャンパス開催に関するチラシを持参し、直接、高校生に手渡して説明を行い、参加者を募る。

(4) 「母校へのメッセージ」の有効活用

- ・本学科の特徴ある取り組みの一つに、出身高等学校への写真レター「母校へのメッセージ」がある。これは大学生活の様子を出身校の後輩に送る「写真付きの卒業後の手紙」である。学生募集の一環として出前授業や高校訪問、オープンキャンパスにもその内容を説明し、効果的に活用する。

6. 地域社会との交流及び社会貢献

(1) インターンシップ制度の活用

- ・「筑紫の心」手帳を作成し、インターンシップ制度とキャリア教育演習Ⅰ・Ⅱの授業との関連位置付けを明確にし、地域社会や保育現場と連携・協力した取り組みをする。学生が自ら職場

体験をしながら、職業に対する意識、能力を高めるようにする。

- ・保育という職業に対する意識や能力を高めることはもちろん、その前提となる、自分の考えや思いを言葉で正確に伝えようとする意識やコミュニケーション能力などを高めるためにも、インターンシップ制度の一層の充実を図る。具体的には、1年次から計画的に「筑紫の心」手帳を活用し、学生の就業体験や学内外における各種ボランティア活動への参加を推奨する。さらに、2年間を通した就職活動支援の一環として、一人一人の学生の個性に応じたバックアップに努める。学生が人間関係の摩擦を少しでも緩和できるように指導助言を行う。

(2) 子育て支援、地域との交流、社会で活躍できる保育者の育成

- ・子ども文化会館や、大学を取り巻く地域の市民センターなどと連携して、学生による子育て支援やボランティア活動を促進していく。保育学科主催の「学生による子育て支援」においては、未就園児を抱えている一般の保護者を対象に呼び掛けを行う。認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園や地元の市民センター（到津・清水・泉台・中井・一枝）に子育て支援開催のポスターを掲示させていただき、周知を図る。今年度は夏と冬の2回開催することを目標としており、学生が主体的に子育て支援プランを立案・実践できるよう、教員がサポートしながら行う。子育て支援チームにより、教員、学生が行った記録を随時まとめる。
- ・九州栄養福祉大学、東筑紫短期大学、地域連携センター教育研究年報の作成に向けて保育学科としての取り組みを強化する。
- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携を図る。

ボランティア活動として認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園の行事の支援を行い、就職後の行事の取り組みの糧とする。又、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園の就職へと繋げる。

以上

令和 5 年度 教育目標の達成状況

— 食物栄養学科 —

令和 5 年度教育目標として、「建学の精神に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士に必要な専門的知識と多様な技術を習得することで、食をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。」を掲げ、学科内で共通理解を図りながら目標達成への課題解決に向けて取組を行ってきた。

(1) アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については、今年度も引き続き重点課題として数値目標に定員 70 名を掲げ、学科教員が同じ認識をもち、共通理解を図りながら取組を行ってきた。

しかし、今年度の学生募集状況は大変厳しく、入学者は 45 名で、目標達成率は 64% である。

入学者数減少の原因として考えられるのは、18 歳人口の減少に加えて、少子化や就学支援の充実等による 4 年制大学志向の増加、コロナ禍が明けたことで幅広い職種での求人の増加による栄養士離れ等が考えられる。実際に高校訪問の際にも進路担当教諭からの厳しい状況説明があった。さらに「栄養士が仕事をしている姿が見えず、高校生がイメージしにくい」という意見も多かったことから、今後は栄養士としての仕事内容や社会貢献についてプラスのイメージを高校生が持てるよう発信していく必要がある。令和 6 年度は、7 年度募集定員 50 名を数値目標に掲げ取り組む。

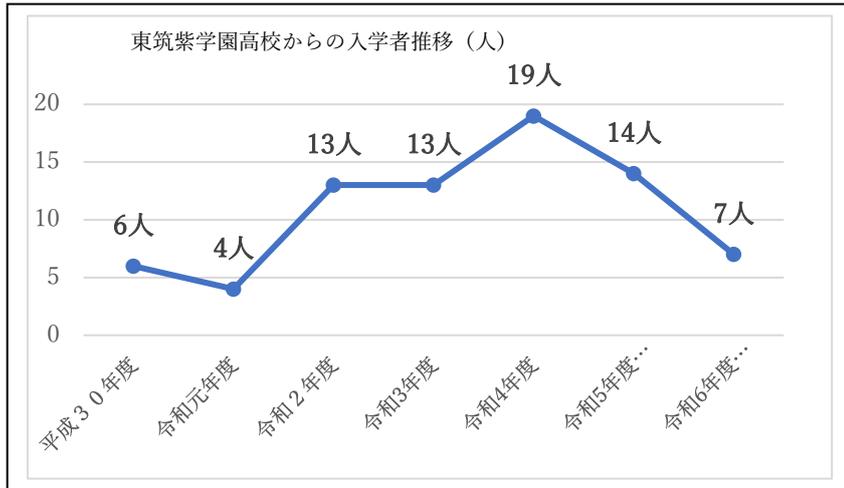
(2) 学園高校食物文化科との連携による高大連携の取組の充実

学園高校食物文化科との連携を深め、高校生が短大の食物栄養学科に興味や親しみをもつことで、短大食物栄養学科への進路希望者の掘り起こしを行い、学生募集に繋げる目的で、令和元年度より継続して実施している。今年度は 1 年生 1 回 (R6.1.29) 2 年生は R5.6.5 に 1 回目を実施し、R6.2.26 に 2 回目を実施した。これまでは確実な学生の確保につながってきたが、令和 6 年度の入学予定者は前年度の半数となった。

そこで、2 年生 2 回目 (R6.2.26) の高大連携では、「大量調理機器を使って集団給食の調理にチャレンジしてみよう！」として、食物文化科の生徒が高校で学んだ知識や技術を生かし、栄養士として必要な集団給食にチャレンジする取組を実施した。

この取組を行うことで、食物文化科の生徒が栄養士への理解を深め、調理師免許を取得した後、本学科に入学して栄養士免許を取得し、さらに、一部の学生は管理栄養士を目指すというステップアップにつなげたいと考える。

来年度も学園高校と連携を図り、共通理解を行いながら引き続きこの取組を実施し、学生募集に繋げていきたい。

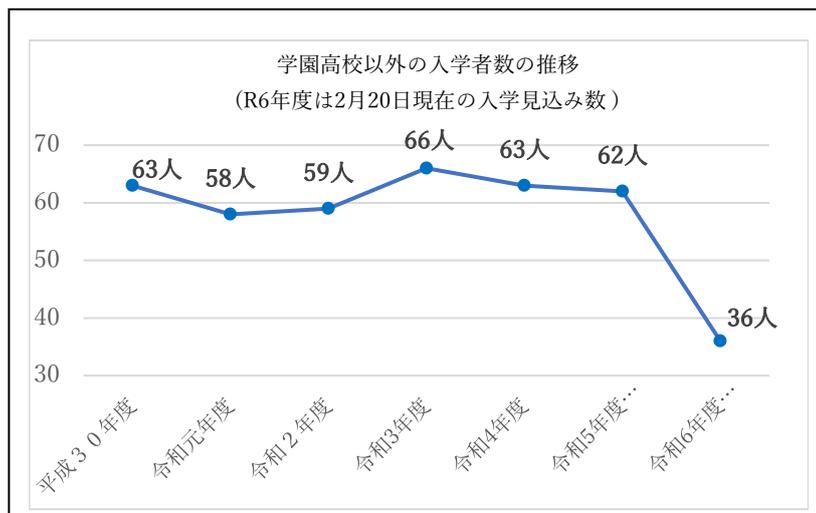


(3) 出前講義・進学ガイダンスの充実

近年の本学科への入学者状況をみると、学園高校以外からの入学者は、これまで60人前後で推移してきたものの、令和6年度は令和5年度と比較して58%(36人)に留まった。

今後はこれまで以上に、出前講義や進学ガイダンスにおいて、少しでも多くの生徒が栄養士の仕事に興味を持てるよう働きかけることが大切である。高校生が栄養士の仕事や魅力について理解を深め、入学後のイメージを確立できるような効果的な資料作成や講義を行って学生の確保につなげたいと考える。

今後も企画広報課及び教務課等の関係部署と密に連携し、調理科があるような高校には本学科の教員が訪問することが必要と考える。また各高校の状況について共通理解を行い、高校生にとって分かりやすく、興味を引くような効果的な資料を作成し、学科の特徴や栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことで学生募集につなげていきたい。



(4) 学科オープンキャンパスの充実

令和4年度(5年度入学)は延べ人数で143人の参加を得ることが出来たが、令和5年度(6年度入学)は延べ人数81人に留まった。オープンキャンパスの参加者数があるまま入学者数に

つながっていることが分かる。

R4年度		5月7日	6月18日	7月16日	7月30日	8月7日	8月20日	合計
参加人数		9人	27人	24人	27人	19人	37人	143人
R5年度	3月22日	5月13日	6月24日	7月22日		8月6日	8月19日	
参加人数	22人	3人	8人	17人		16人	15人	81人

「令和4年5月7日及び令和5年5月13日は学園高校のみ対象」

オープンキャンパスでは、学科の魅力や特徴等に焦点を置いた資料を基に、高校生が興味・関心をもつような栄養や食品に関するミニ実習を取り入れ、在学生との対話を交えて、高校生が実習に取り組みやすい雰囲気づくりを重視して行った。複数回参加の生徒も十数名おり、参加した生徒のアンケートからは、実習がとても楽しかった、在校生が優しく接してくれて安心した、学科のことがよく分かった、とても興味がもてた、等の感想が多く見られた。

また、本学科に入学した理由の中で「親や関係者からの推薦」が上位を占めていることを鑑みると、オープンキャンパスでは、保護者の関心を引くことにも注意を向けなければならない。その点では、昨年よりオープンキャンパスで行った卒業生を招いて職場での働き方や働き甲斐についてプレゼンしたことは、自身の子供の将来像をイメージするのに役立ち、保護者に訴えかける力があつたと思われる。

令和7年度の学生募集に向けて、令和6年3月からオープンキャンパスをスタートさせ、高校生目線に立った分かりやすい資料や表現の工夫について学科内で創意工夫を行いながら、オープンキャンパスに参加した高校生のうち、一人でも多くの生徒が本学科に入りたいと思えるような実験・実習等の取組を積極的に進めていきたい。

(5) 教育支援の体制強化と学修の質の向上

① 基礎学力の向上

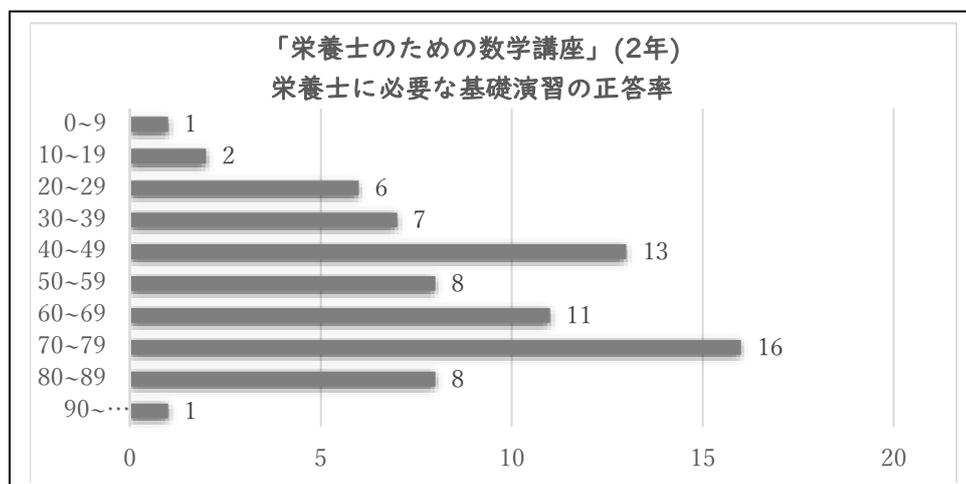
今年度も「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図った。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に個別指導を継続して行った。具体的には、1年生は前期のキャリアアップ演習Ⅰの2回分、前期の基礎化学と後期の食品衛生学の短い時間を利用して栄養数学の学習を行った。

栄養数学において最も基本となる問題は「全体」と「割合」から「部分」を求める計算である。この問題に関してはテストで94%の学生が解けるようになった。

1年間に渡り継続した学習でも、この基本問題を解くことができない4人の学生は、学習全般を苦手としており、向上を図るのが難しい状況にある。そして、応用問題となるのが「部分」と「割合」から「全体」を求める計算であり、いわゆる発注量の計算となる。この問題に関してはテストで80%の学生が解けるようになった。発注量の計算は後期から取り組み始め、10月31日の時点では、41%の学生しか解けなかったが、この3カ月間の学習で解くことができる学生が倍増した。発注量の計算は栄養士の仕事を行う上で不可欠なため、発注計算ができない残り14人については、一人でも多くの学生が解くことができるように個別指導を行う予定である。

2年生は前期のキャリアガイダンスの2回分を利用して、栄養数学を学習し、2回の確認テストを行い個別指導につなげた。

グラフ1は、令和5年度に行った「栄養士のための数学講座」における正答率に対する学生数である。



本基礎演習は、全体で39の問題に答える内容であり、最も正答数の多い学生は32問の正答であるのに対し、最も正答数が少なかった学生は4問の正答であった。このことから、学生の数学に対する基礎的な知識・理解には大きな個人差があることが分かる。

このような個人差を埋めるためには、個別最適な学びを保障することが肝要であることから、個別的な指導を試みたが、研究室を訪ねて数学を学ぼうとする学生は、今年度は残念ながら1名もいなかった。他の教科や実習の課題が忙しかったり栄養数学を学べることの関心が低かったりしたのではないかと推察するが、栄養士という職務を遂行するにあたって数学を使うという場面での理解促進を図ることが必要と考える。次年度からは習熟度に応じて、学生が参加しやすい個別指導の場や時間を設定して指導に当たることが必要と考える。

今後も「栄養士のための基礎数学演習」を実施し本学科学生の実情を把握し補講が必要な学生を対象に個別指導を行い、学生への教育支援及び栄養士として必要な基礎学力の底上げを図る。

② 授業改善について

学生の満足度調査「学科として授業改善に取り組んでいると思うか」の問いでは68.2%の学生が肯定的な回答をしていることから、学科における授業改善については概ね満足できていると考えられる。学生からは、「先生が熱心に教えてくれる」や「わかりやすい」といった声がある一方で、一部の教員に対する「音読だけさせて何を学ばせたいのか分からない」、「効率が悪い授業の仕方時間で時間を奪われている感じがする」といった厳しい意見もあった。

先に述べたように、「本学の教育に対する良いうわさ」で入学を決めた学生もいることから、学生がマイナスに感じていることが、「良くないうわさ」とならないよう、学生の満足度を高めることが大切である。学生の実態を踏まえ、学生の視点に立った授業展開を行い、分かりやすい教材を使用したり、学習活動を工夫したりして確実に習熟できるように授業を計画することが必要と考える。

引き続きアクティブラーニングやグループワーク、共同学習などの授業形式を取り入れ、学生の興味関心を引き出し、理解を促す工夫が必要と考える。

また、「非常勤の先生方の授業が理解できなかった」の声があったことから、授業改善については非常勤講師との共通理解も大切である。教務課と連携して積極的に情報の共有を図っていききたい。

③ アセスメントポリシー「栄免・卒業必修科目別到達目標と自己評価」について

免許・資格の取得において、専門科目の学修成果が思わしくなければ、学外実習や社会に出てから困難を来すことになる。成績評価の結果だけを見ていると、学修意欲に結びつかないため、具体的な到達目標を掲げ、自己評価、満足度、成績を総合的に振り返る学修カルテを作成し、令和元年度（後期）より取り組んでいる。

引き続きこの取組を行うことで、学生が自己の学習の振り返りを行い、面談時の資料として活用し、学生の目標設定や学習意欲の向上にもつなげる。

④ 九州栄養福祉大学3年次への編入について

九州栄養福祉大学等3年次への編入については、1年次より担任や学科教員による学生の状況把握を行い、編入の心構えや意識の醸成を図る取組を行っている。また2年次の当初より、学生の実情に応じて編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努めてきた。

今年度は九州栄養福祉大学3年次へ9名の学生を送り出すことができた。これらの学生は、担任をはじめとする学科教員の声掛けにより、2年次の早い段階から編入試験にむけて意欲的に着実に取り組んできた。

今後も学生への面談等を通じて管理栄養士免許取得の意義等について意識の醸成を図りたいと考える。

⑤ 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として1年・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講した。

1年生では、基本的な生活環境を整える講座をはじめ、就職活動についての意識付けを行う講座も実施した。2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説及び社会人としての心得などを中心に取り組んだ。

受講した学生のアンケート結果を見ると「テーマが適切であったか」「内容が理解できたか」「社会に活用できるか」のどの項目についても80%~100%が肯定的な回答をしており、ほとんどの学生が内容について満足している結果であった。

今後も引き続き、社会で活躍できる栄養士としての資質向上に向けて、効果的な支援に取り組んでいきたい。

以上

令和6年度 教育目標

— 食物栄養学科 —

<教育目標>

「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士に必要な専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。

1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については重点課題として、学科教員が同じ認識をもち共通理解を図りながら学生募集に取り組む。下記(1)～(6)の取組等を通して、入学者数の数値目標として定員の50名を確保したいと考える。

(1) 学園高校食物文化科との連携による高大連携授業の実施

今年度も学園高校食物文化科の学級担任や進路担当教諭等と連携して、情報交換を行いながら生徒の進路の現状や保護者のニーズ等の把握に努め、本学科への志願者の増加を図る。また、令和元年度から実施している1・2年生を対象とした高大連携授業を引き続き実施する。生徒が本学科に興味や親しみをもつとともに、栄養士への理解を深め、本学科に進学したいという気持ちを高めてもらえるよう工夫を行いながら、1年生1回、2年生2回実施する。

(2) 出前講義・進学ガイダンスの充実

学生募集においては、出前講義や進学ガイダンスの充実が大切である。とりわけ本学科のオープンキャンパスに参加した生徒は、高い確率で本学科の受験に至っていることから、出前講義やガイダンス、高校訪問等を始め、学科のホームページを充実させるなど、学科の情報を積極的に発信し、まずオープンキャンパスに足を運んでもらう取組を進めていく必要があると考える。それには、各高校の実情について共通理解し、高校生にとって分かりやすい視覚に訴えるような資料を作成し、学科の特徴や本学科で学ぶ利点、栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことで学生募集につなげる。

(3) 学科オープンキャンパスの充実

高校生が本学科の学修内容に関心を持ち理解が深まるよう、学科の魅力や特徴、本学科で学ぶ利点等を中心に資料や動画を作成し、参加した生徒が本学科に入りたいと思えるよう実験・実習等の内容の工夫を行いながらオープンキャンパスの充実を図る。また、日本栄養士会とも連携し、栄養士活動についての理解や周知を図る。

(4) 学科ホームページの充実

本学科の受験者はオープンキャンパスに参加した生徒であり、オープンキャンパスに参加した生徒は、高い割合で受験に至っている。したがって、より多くの高校生にオープンキャンパスに参加してもらうことが学生募集には不可欠である。そのためには、高校生が様々な情報を入手しているサイト等の調査を行い、そこに、本学の大学情報を積極的に発信していく必要がある。特に学科ホームページは高校生のみならず、保護者にとっても学科の情報を知り得る最適なサイトであるこ

とから、企画広報課と連携し、ホームページを中心に本学科の取組や授業・在学生の様子等について、興味をそそるような見出しや分かりやすく効果的な表現を用いて、積極的に更新を図りながら発信し学生募集に繋げる。

(5) 新たなライセンスの導入に向けた体制整備

現在の取得できる免許・資格に加えて、新たに食物栄養学科の学生全員が選択できる「健康運動実践指導者」の資格取得に向けた体制整備に取り組みたい。

この資格は、栄養士の免許を持って、栄養指導が出来るスポーツインストラクターの資格である。この資格取得には、健康運動実践指導者の養成校で単位を取得すると受験資格ができるが、栄養士を養成する学校もこの養成校になることができる。

栄養士免許を取得する本学が「健康運動実践指導者」の養成校になると、「健康づくり」「疾病予防」いわゆる健康の3要素である、「栄養」「運動」「休養」のうち両輪の資格を持つことができ、社会でのニーズもより高くなると考える。

多数のライセンスが取得できることを掲げている本学科ではあるが、新たなライセンス取得を掲げていくことは、学生募集にもつながると考える。また、運動系の資格は、男子学生の募集にとっても大いに期待できるのではないかと考える。

(6) 「雑誌スポンサー制度」活用による広報活動

図書館を利用する高校生や学生はもとより、広く市民に本短期大学についての普及 PR を行う目的で、北九州市立図書館が企画する「雑誌スポンサー制度」を活用する。

この制度は、図書館の閲覧コーナーに設置している、栄養や健康等の情報を取り入れた生活誌の最新号のビニールカバーに、本学科の広告を掲載する制度である。雑誌は若者から主婦まで幅広い年齢層に愛読されている雑誌とし、本学科の特徴や就職率の高さ、オープンキャンパスのお知らせ等を広告として入れる。進路を考える学生やその保護者等の目にとまれば、学生募集にとって効果は大きいと考える。

北九州市立小倉南図書館及び八幡西図書館の2カ所に令和6年4月から1年間掲載する。

2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

近年、学修面の不安やコミュニケーション不足、さらにキャリアへの不安を抱える学生がみられることから、それらを解消する手立てが必要と考える。さらに休学・退学者の減少に向けても、学生の視点に立った学修内容や生活面等の指導及び充実した学生生活のための支援体制を充実する。

(1) 基礎学力の向上

学修面の不安を軽減し、実践力のある栄養士を養成するには、栄養士として必要な基礎学力の定着が必須である。

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図る。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に個別指導を継続して実施する。

2年次には「栄養士のための基礎演習」として、廃棄率や発注量、栄養価の計算など、実践的な計算問題に取り組みさせる。栄養数学のテキストを使用して全員を対象に確認テストを行い、補講が必要な学生には個別指導を実施する。さらに、食品成分表を使った実践的な問題にも取り組み、到達基準に達していない学生には補講や個別指導を実施するとともに、各教科での指導も併せて行う。

(2)特別支援教育の観点からの学生理解及び支援

近年、合理的な配慮が必要な学生が少なからず見受けられる。学生の合理的配慮の必要性の有無や生活サイクル、将来の目標等の内容を記した学科独自の学生状況調査票を作成し、保健室や学生指導課、カウンセラー等と連携して、共通理解を図りながら学生に寄り添った支援に当たる。

①合理的配慮等困りをもつ学生の早期発見・早期対応

欠席・遅刻が目立つ学生や課題が未提出の学生等について、学科会議等で情報を共有して共通理解を図り、困りをもつ学生の早期発見に努める。また、担任による学生への面談や保護者との連携による早期対応に努める。さらにオフィスアワー等を活用して教科担当による学生への指導も行い、きめ細かな対応を行う。

②非常勤講師との情報交換会の開催

非常勤講師との情報交換会を年1回開催し、学生の実情に合わせた授業内容や定期試験に向けた対応等について協議し、共通理解を図りながら学生の支援に向けた組織的な対応を行う。

(3)分かりやすい授業の工夫

学生の興味・関心を引き出しながら分かる授業を行うには授業の工夫も大切である。授業の目的や自主学習の必要性等を明示し、授業の速度を考慮しながら分かりやすい説明を行って、学生の実情に合わせた授業展開を行う。また対話的で深い学び（アクティブラーニング）に向けた授業の取組を行う。

(4)アセスメントポリシーに基づいた学生支援

建学の精神に基づいた学生生活への取組と目標達成のために、栄養士免許・卒業必修科目において、それぞれの科目の到達目標や満足度、成績等をカルテ内容とした一覧票にして学生が自己評価を行う。そのことにより、学生の履修の意義やモチベーションを維持するとともに、不足している知識・技能についても明確化を図る。

(5)九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

九州栄養福祉大学3年次への編入に向けて、担任による面談の際に学生の希望や状況等を把握し、1年次より編入の心構えや意識の醸成を図る。また2年次の当初より、学生の実情に応じて編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努める。

3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として1・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講する。

1年生では、基本的な生活環境を整える「身だしなみ講座」や「性犯罪から身を守る」等の講座の他、就職活動についての意識付けを行うために「就職活動に関して卒業生からのアドバイス」等の講座も実施する。

2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組む。また卒業後の社会人として必要な「社会人のマナー」や、栄養士業務で就職している卒業生を講師とした講座「先輩に学ぶ」等、教科の時間では取り上げることが難しい内容について、キャリアアップ演習を卒業必修科目として受講させ、学科教員が共通理解を図りながら取り組んでいく。

4. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

建学の精神に基づく行事教育、生活指導教育は、キャリアアップ演習、ホームルームなどを通じて機会あるごとに理解を促す。特に生活指導に関する教育は栄養士養成の上でも重要であり、社会に奉仕できる人間力や実践力を身につけさせるには、まず教員が建学の精神を十分理解し、授業等を通して指導していくことが大切である。

5. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ばせ、職業意識の確立や就職活動の一助とする。

また、早い時期から個人面談を行い、就職指導課と連携して学生の性格特性などについて情報共有を行うことで、就職内定率を100%にする。

以上

令和5年度 教育目標の達成状況

— 専攻科（介護福祉専攻） —

1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

(1) 専門性を習得する教育活動の充実

本年度は、「分かりやすい授業」と「専門的知識と技術の定着」を目指すため、教材研究、教授方法の研鑽、実習施設との連携強化とともに、学生に向けては、能動的学びの意識化を図るため、1年間の専門的学びの見通しと目標について明瞭に伝えていくことに努めた。授業内容の定着については、個々の学生の習得状況の把握と対策が十分とは言えず、次年度の課題となった。

[達成できた内容]

- ・学生の自己学習、授業内容の確認の機会を増やす
- ・実習施設との情報共有、意見交換を強化し、効果的な介護実習を実施する

[次年度への課題となった内容]

- ・学生に対する各授業の習得目標の提示とその目標の達成、授業内容の定着
- ・既習内容の融合し効果的な指導をするための教員間の授業内容のすり合わせ

(2) 主体的学習促進に向けた環境づくり

向学心の土台には、学生自身にとって「学び、成長することが楽しい」と実感できる教育環境の形成が不可欠である。今年度も「専門性が具わる実感（達成感）」、「自己学習の習慣化」を重要視した教育実践に努め、対人援助の礎を育くむべく尽力した。

[達成できた内容]

- ・介護 ICT や医療的ケア児支援、福祉用具メンテナンス等、新たな学外研修や学外講師の派遣を通じた学生の知見と視野の拡充
- ・他大学との介護実践報告会の準備、発表によるプレゼン力の強化、専門職業観の育成
- ・専門領域に関する様々な情報提供や関心分野への探求心が広がる対話

[次年度への課題となった内容]

- ・日々の授業を通じた「学ぶ楽しさが湧出」する働きかけ
- ・学生が専門職業人として主体的に課題を発見し解決する力を育むための授業展開
- ・年間を通じた学生の個別性に応じた学習支援

(3) 就職後を見据えた教育活動への取り組み（令和5年度新規）

情報化社会ではどの職場においてもパソコン等の使用が必須であることを鑑み、パソコン操作の基礎力を習得することを目指した。また、現場の状況に応じて、介護現場における普及拡大に伴う介護 ICT 等の授業、障害児支援の就職を踏まえた医療的ケア児支援の授業を新たに導入した。次年度も現場の新たな取り組みや現状を捉え、常に新しい知識を学生に教示していく。

[達成できた内容]

- ・介護 ICT に関する外部講師の授業による知見の拡大及び就職後の記録作業の戸惑いの軽減
- ・複数回実施した報告会の充実により、プレゼン資料の作成、発表の能力向上

[次年度への課題となった内容]

- ・パソコン操作の個人差に対する指導

(4) 国家試験受験対策の強化

国家試験対策は7年目に入り、各年の課題を改善するなかで一定の指導体制を構築することができている。今年度も学生全員が高得点で合格を手にすることができ、合格率100%を達成することができた。

(介護福祉士国家試験 125点満点 — 本科学生平均点 102.8点 合格点 67点)

[達成できた内容]

- ・断続的な模擬試験実施における苦手分野の把握と課題の明確化による自己学習対策の向上
- ・冬季課題や授業を通じた繰り返しの確認作業による基礎的内容の習得
- ・個々の学生の学習進度に応じた個別指導による合格得点率の獲得

[次年度への課題となった内容]

- ・国家試験対策に向けた意識化と自己学習の取り組み時期の遅れ
- ・日頃の学習が国家試験に直結することの周知(欠席、遅刻、居眠り等による学習欠落の指導)

2. 社会性の育成に向けて

(1) 社会規範の理解と礼節の育成

日々の教育活動を通して、社会人として必要な礼節や規律性の定着を目指したが、授業の出席に関する指導では課題がみられた。

[達成できた内容]

- ・あいさつや適切なコミュニケーション能力の向上
- ・報告、連絡、相談の定着

[次年度への課題となった内容]

- ・遅刻や欠席が多い学生の指導

(2) 就職活動の支援

個々の学生の進路については、様々な情報提供と丁寧かつ柔軟な姿勢のもとに支援体制を充実させ学生の希望に沿うように努めている。早い段階の求人は科内で注視し、学生への確実な情報発信に留意した。

[達成できた内容]

- ・早期における学生の特性把握と職種の見極めを通じた就職先の見通しと声掛け
- ・就職指導課との連携によるスムーズな就職受験指導の実現

[次年度への課題となった内容]

- ・福岡県外、北九州市外に就職を希望する学生への情報提供

(3) 学生生活の支援

今年度も教員相互の情報共有のもとに、学生が有する様々な特性を尊重し、適正を見極め支援していく姿勢を重視した。

[達成できた内容]

- ・学生生活の中で成功体験を重ねた「達成感」の獲得
- ・日々のコミュニケーション、個別の学力支援、実習施設の配置及び実習指導の充実

[次年度への課題となった内容]

- ・個々の学生に応じた課題解決力や困難克服力の向上に関する指導

3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

(1) 「筑紫の心」を養う取り組み

日々の学生生活の中に建学の精神を養い磨いていく過程があることを伝え、学生とともに筑紫の心を育む土壌の形成を目指した。

[達成できた内容]

- ・大学祭等、通常行事における学生の主体性、他者との調和、感謝の気持ちの育成
- ・各行事の意義の理解
- ・「筑紫の心」に関する学生の振り返り

[次年度への課題となった内容]

- ・毎日のお掃除に関する指導

(2) 地域社会における活動

地域に根差した活動を通して知見を広げ、社会貢献の意識の育成、コミュニケーション力、専門職業観の増進に努めた。

[達成できた内容]

- ・介護保険施設開催の高齢者ファッションショー参加による社会性、貢献の意識の獲得

[次年度への課題となった内容]

- ・近隣の介護事業所における活動やボランティア活動の促進等、身近な地域の社会貢献活動

4. 学生募集に向けた対策の強化

(1) 広報活動の積極的展開

今年度は、「第二期専攻科（介護福祉専攻）広報活動計画（3年計画）」の初年度であり、入学者の増員に向けて学内、学外に専攻科の魅力発信、周知拡大に努めた。

[達成できた内容]

- ・保育学科生が円滑に内部進学をするための手厚いサポートの実施
(随時の相談体制、出願手続きのサポート、学費等の相談対応)
- ・学内専攻 Café、オープンキャンパス、リーフレット作成、他大学への資料送付等による内外に向けた情報発信
- ・求職者委託訓練生（福岡県職業訓練「長期高度人材育成制度」）入学者の実現

[次年度への課題となった内容]

- ・ホームページを活用した専攻科の情報発信
- ・高校への出前授業やガイダンスの機会の確保

(2) 保育学科との協働と計画的展開

内部進学は本科入学生の要であり、保育学科生に向けた広報活動は最重要事項である。今年度も保育学科教員のご協力のもとに、入学生の増員に尽力した。

[達成できた内容]

- ・ガイダンスの実施、「進学意見交換会」、「専攻 Café」、「進学説明会」の充実
- ・保育学科生の進学相談体制の充実
- ・「北九州ゆめみらいワーク 2023」における専攻科（「東筑紫の3年間」）の紹介

[次年度への課題となった内容]

- ・オープンキャンパスにおける保育学科参加者に対する紹介

(保育学科参加の高校生及び保護者に対する「保育学科と専攻科の3年間の学生生活」周知の課題)

以上

令和6年度 教育目標

— 専攻科（介護福祉専攻） —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

1. 専門的な知識、技術の体系的な修得

(1) 専門性を習得する教育活動の充実

- ・学生の専門的知識、技術の定着を目指し、講義、演習、実習が有機的に連動する体系的な教育活動に取り組む。併せて、教材研究及び教授方法の研鑽に努める。
- ・介護福祉の現場に求められる新しい知識、技術の獲得を図るため、新たに、医療的ケア児支援及び介護 ICT の授業を取り入れる。
- ・実習施設との意見交換会の開催及び日々の情報共有に尽力し、効果的かつ有意義な実習に向けて協働体制を強化する。
- ・個々の学生の特性を把握し、学ぶ意欲を育みながら一人ひとりが自身の成長を実感できる教育活動の構築を目指す。教員間の協働のもとに、習得度の確認、個別指導の工夫、自己学習の機会の増進に取り組む。

(2) 主体的学習促進に向けた環境づくり

- ・専門領域に関する様々な情報提供や関連分野への探求心が広がる対話等、学ぶ愉しさを引き出す教育活動に取り組む。
- ・受動的な講義とならないようグループワーク、ロールプレイングの機会を増やし、他者との意見交換や自己表現を通じてそれぞれの専門職観の形成を図る。
- ・学外研修や多様な学外授業の設定、外部講師の要請等、教育環境の更なる充実に取り組み、学生の知見と視野を拡充し、専門分野における向学心を構築する。
- ・実習報告会、研究発表会、他大学協働の介護職実践セミナーへの自主的な取り組みを通して、個々の学生の研究テーマの明確化、プレゼン力の向上を図る。

(3) 国家試験受験対策の強化

- ・早期に学生の特性を見極め、教員間の連携及び個別指導を重視する姿勢のもとに、学生に応じた指導方法を検討し効果的な個別指導に尽力する。
- ・各教科の單元ごとに確認テスト、課題提出を実施し、基礎的内容の獲得を図る。
- ・年間を通じた国家試験対策に取り組むため、学生個別ファイルを作成する。確認テスト等のファイリングを通じて学生の習得度や苦手科目の把握を図り、効率的な学習を促進する。
- ・自身に合った勉強方法を模索し、到達目標に向けて計画的、主体的に国家試験対策に取り組むことができるよう学習方法に関する助言や様々な学習ツール等の提示を行う。

2. 社会性の育成に向けて

(1) 社会規範の理解と礼節の育成

- ・社会性を身に付け、規範を遵守し、礼節ある行動を習慣化していく意義を教示していく。学生の理解と納得を得た主体的行動が可能となるような教育活動を重視し、担任による定期面談の実施、日頃の声掛けとともに、卒業生や現場専門職による経験談や講話の実施等、自覚を促す機会

も設定する。

- ・あいさつ、授業の出席、時間や提出物期限の厳守、報告、連絡、相談、適切なコミュニケーション力等が定着できるように日々の授業や教育活動を通して指導を徹底する。

(2) 就職活動の支援

- ・選択肢が多い本科の学生が、進路を定めていくプロセスを大切に、随時の相談体制、情報提供に努める。学生との個別面談を行い、特性や適正を考慮したうえで就職の希望分野を定め、就職活動が円滑に行えるよう支援する。
- ・就職指導課との連携を強化し、面接練習、履歴書作成等の支援を充実する。
- ・北九州市外、福岡県外に就職を希望する学生への情報提供を強化する。

(3) 学生生活の支援

- ・学生との日々のコミュニケーションを重要視し、信頼関係を構築する。
- ・社会人として必要な課題解決力や困難克服力の向上を目指していく。学生の成功体験を重ね、できることが増える喜びの共有とともに、達成感の獲得を支援する。
- ・学生生活を円滑に送ることができるように、常に、関係部署と連携を図り、学生支援に丁寧に向き合う。

3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

(1) 「筑紫の心」を養う取組み

- ・日々の学生生活や年間行事、介護実習等において筑紫の心を育むプロセスを重視する。様々な場面において振り返る機会を設け、筑紫の心の意識化を促していく。
- ・学生と教員がともに「お掃除」に励み、「お掃除」の真意の理解に努めていく。

(2) 地域社会における活動

- ・地域に根差した活動を通して知見を広げ社会貢献の意識を育成する。大学での学びを活かし、近隣の介護事業所等における活動や各種ボランティア活動に参加し、地域社会貢献の啓発に取り組む。

4. 学生募集に向けた対策の強化

(1) 広報活動の積極的展開

- ・広報活動の対象（1.本校保育学科生、2.他養成施設学生、3.高校生、4.保育学科卒業生、5.保育士資格を有する社会人）を明確にし、計画的な広報活動を実施する。
- ・特に、高校生及び保護者へのアプローチを重要視し、保育学科と専攻科（介護福祉専攻）の3年間の短大生活を志願する保育学科入学者の増員を図り、内部進学者数の拡大を目指していく。
- ・本学専攻科（介護福祉専攻）の周知拡大を目指し、オープンキャンパス、高大連携、北九州ゆめみらいワークほか、多方面にわたる周知活動に積極的に取り組む。
- ・関連部署の連携のもと福岡県職業訓練（長期高度人材育成コース）制度の申請、広報活動に取り組み、求職者社会人の入学ルートの確立を目指す。

(2) 保育学科との協働と計画的展開

- ・保育学科生を対象にしたガイダンスや「専攻 Café（保育学科生を対象にした短時間のミニ懇談会）」、「進学説明会」の充実、日々の保育学科教員との意見交換等を通して、内部進学者の増員に尽力する。

- ・保育学科との協働のもと、オープンキャンパスや高大連携において、高校生、保護者、教諭を対象に、「東筑紫短期大学の3年間」の魅力発信と周知活動に積極的に関与する。

以上

令和5年度 達成状況

— 学 生 部 —

本年度の学生部における重点課題は、Ⅰ. 学生支援・教育指導体制の強化・充実、Ⅱ. 学生部の業務の改善及び情報化の推進の2つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践した。また、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行に伴う対応を行った。以下、本年度の業務内容計画・目標の検証及び評価と次年度に向けた課題について報告する。

1. 年度当初の業務改善計画・目標の検証及び評価

【学生指導課】

◆ 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

本年5月に、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行となり、従来型の対面による行事教育・人格教育を目標に調整を行った。ただ、新型コロナウイルス感染症が完全に収束されたわけではないので、感染状況を見つつ慎重に行った。感染拡大防止のための行動指針であるBCPレベルは平常時レベルとし、本学ホームページで周知した。なお、引き続き、各学科との連絡・相談等は電話やメール、学内ポータルサイト・UNIPA等を利用し、積極的に行事教育の意義や意味を共有した。各種の全学的行事の開催に際しては、感染拡大防止対策を段階的に平常時にもどしつつ対面で行った。現在、マスクの着用は、個人の判断に任せ、学内トイレのハンドドライヤーについても使用を再開している。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

各学科のクラス担任を中心に担当学生の授業出席状況を適宜確認し、遅刻・欠席が目立つ学生に対しては、保護者を含めて連絡・面談などを実施することで、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努めた。また、現在休学中の学生への定期連絡や相談対応など、学生の復学に向けての取り組みの推進・強化を図った。連絡には、電話、メール、UNIPA、郵便等を活用した。以上の担任等の尽力が功を奏し、全学で10名の復学者があった。

今年度状況：(1月29日付、[]は昨年1/29付実績、GAKUENより)

休学：33[20]件(管：12[3] 理：11[5] 作：2[5] 保：6[1] 栄：2[6] 専：0[0])

退学：24[18]件(管：8[5] 理：6[7] 作：2[2] 保：2[1] 栄：6[3] 専：0[0])

② 学生相談・支援体制の確立

保健室及びカウンセリングルームによる学生支援体制を継続するとともに、厚生委員会を通じて各学科との連携を図り、各学科長及び担任等による情報共有並びに学生指導上に関する問題点や配慮すべきことなどについて慎重に協議・検討するとともに、学生指導に役立てた。

学生支援の研修会等の学外オンライン研修会及び対面研修会に積極的に参加し、課員のスキルアッ

プに努めた。

日本学生支援機構「高等教育の修学支援新制度」にも引き続き多くの学生が採用され、家計急変採用、緊急・応急採用の対象学生にも対応した。

以上、経済逼迫による休退学を未然に防ぐため、課員、他部署、そして、担任との情報共有及び協力体制をより強めた。

③ 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

学友会執行部については、新入生歓迎行事を講堂兼体育館で行った。年間の行事の紹介に加え、クラブ・サークル勧誘プレゼンテーションも行き、学友会としての募集も成功裏に終わり、たくさんの新入生部員獲得となり、大学、短大とも活発な活動が行われた。学友会関連行事のうち、レクスポは、5類移行前の4月末に行われたので、感染症対策の為、短大を午前、大学を午後に行い、学生を分散登校させた。競技種目については、大学は、大縄跳び、玉入れ、モルックの3種目、短大は、ボッチャ、モルックの2種目で行った。いずれも接触の少ないゲームであったが、講堂兼体育館、第二体育館、中庭と分け、こちら、学内で学生を分散して行った。11月に行われた大学祭は、昨年を引き続き2日間一般公開で行い、感染拡大に留意しながらも以前のようなにぎわいをとり戻し、大盛況だった。昨年は、カフェテリアや2号館、3号館の調理室と隣接した講義室限定での飲食としたが、今年度は、中庭にテーブル席を設けるなど規制を緩和した。そして、学外からの一般客も、本学学生による調理に舌鼓を打ち、子ども連れには嬉しい保育学科の体験型展示も好評であった。また、高大連携地域おこしのイベントやステージ企画も講堂兼体育館で行われ、大人も子供も楽しめる大学祭となり大いに盛り上がった。

学友会執行部選挙は、昨年同様、UNIPA を利用し、オンライン選挙を掲示し、事前に動画撮影されたものを期間内にオンデマンド配信し、UNIPA のアンケート機能を利用し投票結果の集計を行い、執行部人事等の採決を無事に完了した。

計画・運営においては、執行部員一人ひとりが自主性、積極性、責任感をもって行った。特に、主体となる2年生は、前年度学友会経験者で構成され、企画、そして、緻密なスケジューリングで、12月に行われた針供養・学内成人式では、コロナ前の巫女さんの正規人員数で行い、より荘厳さのある針供養になった。また、1月の食物感謝祭も同様に、新しい年の初めにふさわしいすがすがしがあった。

クラブ・サークル活動は、これまで自粛していた体育系のサークルも活動をはじめ、エネルギーがコロナ禍で有り余っていた学生たちのはつらつとした姿は、コロナ禍からの夜明けを感じさせた。文化系サークルについても、コロナ禍の自粛ムードはふっしきされ、活発な活動が行われた。

以上のように、5月の新型コロナウイルス感染症5類移行以来、ポストコロナの中ではあるが、それまでの自粛された行事や活動等が再開された。教職員と学生がこの3年以上に渡って培った感染症に対する予防意識の高さとそれに基づく行動によるもので、その後も、一度の学内クラスターが発生していない。

南北キャンパス間の学生交流についても、「種蒔き祭」「収穫祭」といった学内農園行事を付属こども園の園児も含めて合同で行い、針供養の巫女さん役も、南北キャンパスより希望者をつのり行った。

④ 国際交流に向けての取り組み

5月の5類移行後早速、地理的に近く、費用的にも安価で行けるフィリピン国セブ市のラブラブセ

ブ国際大学との協力提携を結んだ。本年度末3月には、この提携校学内での企画として、ChatGPTを利用した栄養指導、折り紙体験会、そして、NGO 団体を通して地元のこどもたちとの交流会を6泊7日の予定で行う。なお、昨年8月には、韓国研修が3泊4日で、9月には、アメリカ研修が5泊7日で行われた。

◆ 危機管理及び業務管理体制の構築

① 危機管理体制の構築

「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策本部」は、5月の新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、本学独自のBCP（行動指針）を平常時レベルに下げ、本学ホームページで発表、その後、解散となった。この4年間のコロナパンデミックへの対応経験は、今後も、いつ何時にも起こりうる次の感染症パンデミックへの対応に生かされ、万一発生の際は、迅速かつ的確なものとなると思われる。

② 事務処理作業の効率化

□各種証書等の券売機及びデジタルサイネージ（電子掲示板）の運用

各種証書等費用の券売機を学生部の出入り口付近に設置することにより、動線及び諸手続きが簡素化され、各課員の業務の効率化及び作業量の軽減が実現されたが、各種手続きがワンフロアで行うことができない物理的な要因の課題は残されている。

各号館入口に設置されたデジタルサイネージ（電子掲示板）を学生や教職員への注意喚起やお知らせに活用する部署も増えた。従来の紙媒体の掲示物とくらべ、視覚的なアピールやタイムリーな情報発信が可能となっている。

□業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成のための学外SD研修会は、月一程度、オンラインや対面でいずれかの課員が可能な限り参加した。

両（北区・南区）キャンパス間における職員同士の連携強化のため、SD研修が、南区キャンパス主導で行われている。月に2回の割合で、主にオンラインで行われている。こうして、物理的なハードルで、これまで参加できなかったSD研修も、オンライン参加のオプションができ参加できたのは、コロナ禍の良い副産物といってよいと思う。

授業料減免及び給付型奨学金制度も4年目となり、学生への対応や連絡等も習熟度を増し、学生の利益になるよう努めた。また、授業料減免及び給付型奨学金制度は、他部署間との連携が必須であるので、その点でも情報共有や協力を通して、他部署との関係性が強化された。日本学生支援機構の給付型の受給対象家庭の枠も引き続き広がっていく傾向にあるので、今後もその変化についていき、タイムリーに学生に紹介し、サポートを行っていきたい。

③ 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

□学生寮における健康・衛生管理の徹底

昨年度で閉寮となった小倉北区キャンパスの寮に関する対応として、外部業者と提携を交わし、当該業者が管理・運営する寮形式の物件を本学の提携寮として学生へ案内した。今後も、学生の利益となるよう、他業者との提携も視野に入れたい。

□カフェテリア及びショップ等に対する衛生管理及び学生満足度の向上

本年度初めより、カフェテリア及びショップの新しい業者の委託業務がはじまった。こども園の給食も委託している関係で、カフェテリア業務の出だしがあやぶまれたが、徐々に、メニュー数が増え、同時に、売店での弁当やどんぶりもの、そして、パン類の販売など、学生の多様化したニーズに応えられるよう選択肢も増やした結果。販売食数も順調にのび、学生の満足度が反映されている。月一で開催される委託業者と本学管理栄養士教員や関係職員で構成される給食管理委員会で、毎月の運営状況の把握と共に、問題がある場合、対策等が検討され、随時、改善が行われた。

【就職指導課】

学生による事務局満足度調査」集計結果からも本年度の取組が学生にとって概ね好意的に受け止められているものと認識しているが、大学食物栄養学部在学生からは“雰囲気がとても話しかけづらい。対応があまり良いとは思えなかった。”とのコメントが自由記述欄に寄せられていた。人員の入れ替わりや相談数の増加にもより課内全体に余裕がなく学生支援の機会を逸してしまったことは大変悔やまれることであり、助言や支援を求める学生方へ公平かつ適切なサービスを提供できるよう、改めて課内業務の最適化と親和の精神に基づく窓口対応に努めたいと考える。

以下、年度当初目標における個別事項について検証を記載する。

① 公務員試験対策講座の刷新

大学食物栄養学部「鹿児島県（栄養士）」「八王子市（管理栄養士）」「下関市（管理栄養士）」「直方市（管理栄養士）」「福岡市（中級学校事務）」5名（昨年1名）、短期大学保育学科「北九州市（保育士）」「福岡市（保育士）」「下関市（幼稚園教諭）」「中津市（保育士）」4名（昨年2名）、合計9名（昨年3名）の合格実績となり、難関である公務員試験合格者を増加させることが適った。過年度に引き続き、『資格の大原』様にご支援を頂きオンデマンド型の講座を提供したが本年度受験に向けた受講者数は6名に留まり、平均視聴率も30%前後で推移した。現在、大学3年生・短期大学1年生に向けて募集中である次年度（令和6年度）の公務員対策講座については、先方と交渉を行い4月以降に一部対面講座を開講予定とするなど刷新を図ったが2月時点で受講手続完了者が5名以下となっている。本学においては年間を通じて正課のカリキュラムが密に組み込まれている為、学生方の空き時間かつ外部講師等が対応可能となる時間帯の設定に留意する必要があると認識している。引き続き、講座の提供方法や家計の負担とならない金額設定等を学部・学科とも協議し、『資格の大原』様以外の業者からも情報収集を行うなど就職指導課として最適な講座の構築・提供に努めたいと考える。

② 学内合同企業説明会の継続開催

北九州市「地元就職に向けた市内大学等助成事業」が令和4年度をもって終了となったことに伴い、令和5年度は大々的な学内合同企業説明会の開催を見送った。しかしながらリニューアルされたUNIPAの掲示配信機能を有効活用し、各種就職支援イベントや求人情報等を継続的に配信した。ポストコロナの連絡ツールとしてUNIPAの掲示配信機能が学生方へ浸透・定着したこともあり、就職支援に係る配信情報の開封率は6割近くまで向上した。また、学内の合同企業説明会を開催しない代替案として、ご依頼を頂いた個別の企業・法人単位による学内個別面談会や説明会についても随時配信を行い、希望者が生じた際には先方人事担当者との取次を担い、個々の事案に応じた対応に努めた。令和6年度についても、引き続きこの方針に基づき柔軟な対応を継続したいと考える。

③ 多様化する学生のニーズに適う求人開拓

資格や免許に紐づく従来の業種に囚われない働き方を志望する学生が増加傾向にある為、本年度も引き続き各商工会議所や自治体、職能団体が主催する情報交換会及び採用担当者説明会に出席をした。ポストコロナを経てオンラインによる出席も可能となってきた為、学内からの遠隔出席を行うなど学生支援業務との両立に努めた。また、大学に寄せさせた正規の求人以外にもハローワークや各種求人媒体の公募情報を随時確認するようし、学生方に有意であると判断した内容については、UNIPA 掲示配信機能を用いてプッシュ型の情報提供を継続的に実施した。

各教授会にて報告する昨年対比概況においては、大学部門食物栄養学部は昨年対比を若干割る数値であったことを除き、短期大学部門は全ての学科・専攻科にて昨年対比を上回る実績を残すことができた。

本年度は特別な配慮や支援を要する学生からの要望はなかったが、引き続き各学部・学科のクラス担任とも連携し、外部機関からの支援が必要となった際を想定した各種福祉政策の情報収集も怠らぬよう十分に留意したい。

④ 業務内容の見直し・改善 等（昨年度に記載した内容のうち、達成事項・経過を列記）

- ・対面型開講を主とする公務員試験対策講座の検討。
...令和6年度開講に際しては、一部科目又は模擬試験等を対面実施する形で開講予定。
- ・学内合同企業説明会の充実及び開催の継続。
...本年度より試験的に、ご依頼を頂いた個々の事案に応じて掲示配信による告知及び希望者の確認を徴したうえでの随時開催とした。
- ・各種情報交換会等を通じた新規求人の開拓。
...過年度に引き続き、各商工会議所や自治体、職能団体が主催する情報交換会及び採用担当者説明会に出席をした。また、オンライン型の人事採用担当者との面談会においては、先方からの事前予約もあり、新たな食品メーカーや小売・飲食事業を展開する企業方とのご縁を頂くことが適った。
- ・「就職ガイダンス」のブラッシュアップ。
(新卒応援ハローワーク様や若者サポートステーション様を招いた講演等の開催)
...本年度から、前職員であったキャリアコンサルタント資格保有者にもご登壇を頂き、より実践的なガイダンスを提供することができたと認識している。
また、新卒応援ハローワーク様にも講師派遣を依頼することで、選任就職支援ナビゲーターからの、自己分析ワーク等を織り交ぜた実用的な講演を提供頂けた。
- ・ハイブリッド型の就職支援（履歴書・小論文・面接指導 等）の更なる充実。
...オンライン予約システムの周知も行き渡ったこともあり、学生支援の機会逸失を予防できたものと認識している。また、窓口にて個別に希望を徴した事案についてもシステムへ反映し、可視化とともに予約状況の共有化に努めた。
- ・学生部主管の各行事への積極的関与。
...学生部が主管する各行事について、会期前から当日までの全工程で分掌に応じた業務に従事するとともに記録の保管にも務めた。
- ・保健室、カウンセリングルームの先生方及び学生指導課との学生情報共有体制の構築。
...身体的な症状を訴える学生に対し保健室看護師からの要請に応じて、「学生相談室」を提供するな

ど個別事案に応じた柔軟な対応に専心した。

- 学内掲示版貼付就職情報、イベント情報の更新頻度向上。

...学内掲示版への各種情報媒体掲示については、前年度よりも更新の頻度を上げより最適な時期に最適な媒体が学生方の目に触れるよう配慮した。また、リニューアルされた UNIPA の掲示配信機能も併用し、学外でも常時就職関連情報にアクセスできるよう配慮した。

以 上

令和6年度 年度目標

— 学 生 部 —

【学生指導課】

◆ 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

本学では、現在、新学部、新学科構想が進められている。それに伴い、増加する学部数、学科数、そして学生数に対応した行事教育の在り方が問われることになる。そして、現在ある施設、アップグレードされる施設の物理的な制限の中、現在の行事教育・人格教育の質を維持する工夫が必要となる。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

各学科のクラス担任との連携をさらに図り、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努める。休退学の理由の一つに経済的な理由があるが、それには、奨学金制度の周知徹底を行い、2つ目の理由と考えられる学生の学業への意識低下や欠如には、各学部・学科との連携により意識の向上を強く図っていく。特に、入学時からの意識づけは大切であると考えている。

② 学生相談・支援体制の確立

多様化する学生の体的面やメンタル面の健康サポートを保健室及びカウンセリングルームにより継続するとともに、厚生委員会を通じて各学科との連携を図り支援していく。

対面のオンラインカウンセリングを基軸に、必要に応じてオンライン会議システムを活用し、学生支援に役立てたい。

障害学生に対する適切な対応が行えるよう、引き続き、積極的に研修会にも参加し、課員のスキルアップを目指す。

デジタルサイネージ（電子掲示板）のコンテンツをさらに充実、多様化し、学生・教職員への情報発信のツールとして引き続き活用していく。

③ 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

新型コロナが5類移行後の現在、執行部のあり方もポストコロナを意識する必要がある。しっかりした学生間のコミュニケーションをもとに、引き続き盤石な体制構築と維持を目指し、教職員も支援していきたい。また、各種のリーダーズトレーニングへの参加も可能なので、それらへの参加も合わせて執行部学生としての役割・心構えなどの涵養に努める。

クラブ・サークル活動については、ほぼコロナ以前に戻りつつあるが、コロナ前の活動の経験のない学生による運営となるので、教職員のサポートがより大切になる。

④ 国際交流に向けての取り組み

フィリピン国セブ島の大学との提携が結ばれたので、福岡という地の利を活かし、積極的に語学留学や交流プログラムを推進していきたい。その際、昨年7月に発足された地域連携センターの海外部

門にも協力を要請したい。

◆ 危機管理及び業務管理体制の充実・強化

① 危機管理体制の充実

各クラスの緊急連絡網や UNIPA 及び本学ホームページを活用し、連絡や掲示のタイムリーかつ効果的な周知法をさらに発展・充実させる。ポストコロナとはいえ、未だ、感染者が、不定期的に学内でも発生している。コロナ禍に作成された感染者への対応マニュアルに基づき、引き続き、保健室、教職員の連携により万全に対応して感染拡大を未然に防いでいく。

② 事務処理作業の効率化

□各種証書等発行の効率化及びデジタルサイネージ（電子掲示板）の活用

券売機の導入により、申請業務の処理が簡素化されたが、発行部署が証明内容により分かれているため、学生には未だ戸惑いがみられる。さらなる学生への周知徹底と、各課員の業務の効率化及び作業量の軽減を目指す。

デジタルサイネージ（電子掲示板）の各部署での活用とコンテンツの充実を図る。

□業務内容の見直し・改善

増えている対面研修へ積極的に参加し、さらなる業務スキルをアップする。また、ポストコロナで培ったオンラインスキルを駆使して県外のオンライン研修への参加、業務活動の省力化、生産性の高い部署間連携体制を構築していく。

③ カフェテリア、ショップに対する連携・強化

□カフェテリア及びショップ等に対する衛生管理及び学生満足度の向上

引き続き業務委託業者と月一の給食管理委員会ミーティングをもち、健康的な関係性を維持するとともに、現場の業者スタッフとの連携・協力により、学生、教職員の満足度を上げていく。

【就職指導課】

① 公務員試験対策講座のリニューアルと対面開講の実施

従前から課題として上がっている学内公務員講座の実施形態について、引き続き内容の刷新と対面開講実施を前提としたものとして複数の事業者への情報照会を行いたいと考える。講座の設計にあたっては、事前に対象年度の学生方に希望調査を行うなど、実利のある講座が提供できるよう慎重に対応したいと考える。

② 個別の学内企業(法人等)説明会開催の活性化

令和5年度から試験的に、希望制の個別企業説明会を展開した。令和6年度は校舎の増改築工事も実施される為、個別開催が適しているものとする。次年度は開催頻度を向上させ、希望を頂いた企業（法人等）からの個別説明会を活性化したいと考える。

③ 課内業務内容の見直し・改善等

令和6年度は以下を見直し・改善事項としたい。

- ・本学履歴書様式の記載内容の検討等。(大学部門に限る)
- ・LINE®の“オープンチャット機能”の導入検討。
- ・卒業生向の就職支援ツールの導入検討。
- ・デジタルサイネージの利活用。(就職・イベント情報の告知 等)
- ・県下の医療法人、社会福祉法人等をはじめとする新規採用枠の開拓。
- ・人員の交代及び校舎増改築に伴う、仮設部署内における業務の平準化・効率化

以上

令和 5 年度達成状況

— 教 務 部 —

(1) 学生募集について

入学定員の確保に向けた学生募集に取り組む。一人でも多くの志願者を確保するために、教員対象入試説明会、オープンキャンパスの開催、高校訪問、出前講義や進学ガイダンスなど内容の検討も含め可能な限り取り組む。

検証及び評価

「一人でも多くの志願者を確保する」と掲げた学生募集だったが、受験者数はどの選抜においても殆どの学部学科で減少した。特に短大は、大学志向が更に高まる中で厳しい状況に置かれた。

そのような状況下ではあるが、今年度はコロナ禍でやむなく中止していた入試説明会を再開した。37校39名の高校教員の出席があり、アンケートにも様々なご意見をお書きいただいた。「丁寧な御指導、理念に沿った教育活動が大変良くわかりました。」といったご意見を複数いただき、対面で直接的に誠意をもってお伝えすることの大切さを改めて感じたところである。また他にも複数の先生から、「学生の普段の様子を知りたい、見たい」といった要望や、「就職の取組みなどについて、もう少し詳しい話が聞きたかった」といった感想などがあった。貴重なご意見として、来年度の開催に向け参考にしたい。

オープンキャンパスや進学ガイダンス、出前講義など、直接高校生に本学をアピールできる機会もコロナ禍前と同じとはいかないまでも増えてきた。教務部はもとより、各学科の先生方のご協力は厚く、特に出前講義には授業の合間を縫って積極的に参加していただいた。しかし、タイミング的には殆どが2年生対象であり、今年度の受験生まではコロナ禍であまり実施できていなかった。次の現2年生への募集効果を期待したい。

教務部としては、会場形式や高校会場の進学ガイダンスへもれなく出席し、本学の教育の特長やアピールポイントを説明してきた。その回数は80回を超えるが、実際の面談者数は減少しており、出願まで結びつくことは難しい、という結果を真摯に受け止めなければならない。

南区キャンパスでは、学生広報 SNS 発信 (Instagram、Tiktok) として、学校生活や大学生活について発信しようという意思を持った学生を集め、大学名を使った SNS アカウントを作成した。他大学とのつながりや高校生とのつながりを一部で結ぶことができた。反省点として、発足してからの発信数が少なく、高校生への認知度が非常に低い状態である。また、本学の学生自身もどう活動を進めていくか悩んでおり、今後も大学としての積極的な関与が必要な状態であり、教務としてどこまでサポートすべきか、学生のモチベーション維持をどうしていくかが課題である。

(2) 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上に努める。教育過程における学生支援と教育の成果に向けて業務内容の精査と充実をはかる。また、各々が昨年度の反省を踏まえた改善と教育体制の支援及び情報の共有化、業務の効率化に努める

検証及び評価

前年度から検討を重ねてきた GAKUEN システム (UNIPA 含む) のバージョンアップについて、ようやく今年度 7~9 月にかけて導入のための研修や切替のための作業を行った。業者によるシステム導入のための研修を何日も受け、その後も確認や微調整を続けながら現在の本運用に至っている。課員全員で受けたオンラインによる研修は延べ 14 日間で、総時間は 44 時間に及ぶ。その間通常業務も同時進行で動いており、毎日大変な中でも、課員同士で確認し助け合いながら取り組んだ。また他部署との連携も積極的に行うことで、大きなトラブルなく現在運用できている。これにより、学生支援や教育体制のサポート、教務事務の効率化が進んでいる。

(3) 認証評価に向けた取り組みについて

今年度受審の認証評価に向けて、教務が関わる業務内容の精査に取り組み、検証や改善が浮き彫りとなったものについては速やかに確認や対応を行う。また、建学の精神や教育理念、3 つのポリシー等を踏まえた学修成果の可視化へ向けたポートフォリオの充実をはかる。

検証及び評価

認証評価に関しては、教務部担当の資料作成など課内で確認しながら必要なものを揃えることができた。昨年まで具体的な運用に対する措置が取られていないままとなっていたポートフォリオについても、認証評価の重要な評価案件でもあり、大学各学科で行事教育やキャリア教育での活用を教務部から働きかけ、利用をすすめた。教科の学修成果の可視化としては整備途中であり、活用にはまだ時間を要する。

評価委員から指摘のあった成績認定や科目の履修方法など、規程との関連について今後も学科と連携し、教務部としてのサポートを慎重に行わなければならないと考える。

(4) 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の方々に還元し、生涯学習に関与するため、シニアカレッジや市民カレッジ等の公開講座の実施に向けて取り組む。

検証及び評価

北九州市立年長者研修大学校周望学舎との協同開催である「シニアカレッジ」を今年度も開催することができ、21 名の受講があった。講師を引き受けていただいた学長はじめ先生方のご協力のおかげで全般的に好評を得た。コロナ禍のため中止していた、南区キャンパスでの開催も復活させたが、リピーターの方も多く、更なる内容の刷新にも取り組みたい。

「市民カレッジ」では今年度も後期の大学連携リレー講座に、本学教授の協力を得て講師派遣ができる運びとなった。次回も可能な限り、積極的に参加したい。

南区キャンパスで開催した「メディカルフェスタ」では、リハ学部の学びや取組について小中高生をはじめ、近隣の方や障害のある方等多様な方々に来場いただき、広く交流ができた。

「北九州ゆめみらいワーク 2023」では、全学科から積極的にブース協力をいただき、教務部としては事務担当窓口としてサポートを行った。多くの来場者があり、中学生から高校生まで幅広く将来の職業を考えるきっかけとしてのキャリア教育に貢献できたと考える。以上

令和6年度 年度目標

— 教 務 部 —

(1) 学生募集について

本年度の入試結果を真摯に踏まえ、入学定員の確保に向けた学生募集に取り組む。一人でも多くの志願者を確保するために、他部署や学部学科との更なる連携を図り、教員対象入試説明会、オープンキャンパスの開催、高校訪問、出前講義や進学ガイダンスなど内容の検討も含め可能な限り取り組む。

新設予定の学部学科の学生募集についても早急に具体的な案を提示し、SNS など様々なツールも活用して情報発信することで、受験者数を確保したい。

(2) 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上に努める。教育過程における学生支援と教育の成果に向けて業務内容の精査と充実をはかる。また、各々が昨年度の反省を踏まえた改善と教育体制の支援及び情報の共有化、業務の効率化に努める。

(3) 新学部・新学科設置に向けた取り組みについて

本学が100周年へ向け、建学の精神「筑紫の心」を基盤にした教育の土壌を守っていくためにも、全教職員で協力し新学部・新学科の開設を成功させなければならない。設置準備にあたり教務部にも、関係する申請書類作成や学生募集などかなりの重要な任務がある。普段からの部内の協力体制をさらに深め、業務の明確な指示、詳細な打ち合わせ、「報・連・相」を大事にして取り組みたい。

(4) 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の方々に還元し、生涯学習に関与するため、シニアカレッジや市民カレッジ等の公開講座の実施に向けて取り組む。

以上

令和5年度 達成状況

－ 事務部 －

庶務課

- ・2号館のトイレを様式化する。
学生満足度調査での要望事項であるトイレの様式化については計画通り改修終了した。
- ・ワークフローの推進（高性能複合機の利用により、郵便物等受付事務の簡素化を図る。）
令和6年1月からスタートした電子帳簿保存法の施工に合わせ高性能複合機を導入し郵便物の受付事務の合理化を計画していたが、本学は電子帳簿保存法の対象外のため導入中断した。しかしながら、効率化の観点から継続して検討していく。

会計課

- ・業務マニュアルの作成・充実を図る。
給与・業者支払い・校納金事務等において副担当を決め幅広く事務知識を習得中。互換体制を整えていくとともに業務マニュアルも随時作成している。
- ・大学・短大の校納金収納事務等のネットバンキングの利用促進
業者による校納金システムのシステム更新に際し、不具合等発生し解決に時間と労力を要した。そのためネットバンキングの利用促進までは進まず次年度の課題として残った。

以上

令和6年度 年度目標

－ 事務部 －

庶務課

令和6年度は2つの新学科設置準備とそれに合わせ校舎の改修が3件予定されている。

- ① 旧学生寮、1号館、5号館の改修工事について関係部署や工事会社と密に情報共有し学生の安全に十分配慮しつつ工事を期間内に安全に進めていく。
- ② 令和7年度こども教育学部および食環境データサイエンス学科の開設に向け備品教材等の環境を整える。

令和7年4月には改修した新しい校舎で新学科がスタートできるよう万全を期していく。

会計課

- ① 令和6年度は3件の校舎改修工事と新学科設置経費により大きな支出超過が予想されており予算管理を徹底していく。
- ② 事務効率化を推進していく
 - ・立替経費の口座振込
前期は教職員の立替経費についてアスクル利用を全校的に推奨し現金精算の減少を図った。今期は立替経費および交通費の口座振込を検討し一層の効率化を図りたい。
 - ・校納金収納事務の効率化を図る

口座引落方式をはじめ校納金（授業料等）収納事務の効率化を検討していく。

以上